

6. 障害者との交流体験を生かした総合学習

— 「養護学級と交流をしよう」を通して —

原 宏

1. 講座の基盤

(1) 講座設定の理由

本校には、附属学校の特殊学級としては数少なくなつた併設の「養護学級」がある。しかし、校舎が別棟であり、しかも離れているため、これまであまり相互の関わりはなく、お互い「近くて遠い人」という存在であった。

普通学級の生徒の、養護学級に対するこれまでのイメージは、事前のアンケート等からみると、上に次のようなマイナス評価が多かった。

・暗い ・わがまま ・かわいそう ・うまく話ができない ・自分たちよりできることが少ない

今回の総合学習では、「福祉」をテーマの一つとして掲げている。身近な同じ校舎内の養護学級の生徒との活動や障害者の方々との関わりを通して、養護学級や障害者の理解だけに留まらず、「福祉とは何か」、あるいは「自分の生き方」について考えて欲しいと思い、本講座を設定した。

(2) 学習活動の工夫

ア. 体験を重視した学習活動

《仮説》

人々の思いや考えに触れることができるように体験を工夫すれば、生徒は自分とは異なる視点から課題をとらえ直し、自分の生き方を見つめ直すであろう。

仮説に基づき、体験活動を実施するにあたって、以下の点に配慮した。

- ① より多く実施する。
- ② より幅広く実施する。
- ③ 講演・講話等の聞く体験を入れる。

また、以下の点に留意した。

- a. 体験活動に養護学級の生徒の意見や希望を反映させるため、事前に活動の希望調査を行った。また、活動内容を事前に報告するなど、一方的な活動・交流にならないこと。
- b. 「してあげる」、「してもらおう」といった関係の関わりではなく、お互い対等な立場に立って、お互いの良い所が見える交流であること。

2. 福祉教育の視点から見た総合学習

(1) 福祉とは？

広辞苑で「福祉」をひらくと、①さいわい・幸福、②消極的には生命の危急からの救い、積極的には生命の繁栄 とある。

我々が言う福祉とは一般的に社会福祉であり、「乳幼児・老人・障害者といった社会的弱者に対する援助や思いやり」であるといわれている。

このように社会福祉では、対象は人であり、同じ人間としてよりよく生きるために具体的に何をすべきか、何ができるのかといった「生き方」の追求が課題となる。

(2) 福祉学習の心得

一番ヶ瀬康子氏は、『現代社会福祉論』（学文社）の中で福祉を学ぶ者に必要なこととして、以下の5点をあげている。これらは、我々の考える総合学習（福祉）の展開と共通するものである。

- ① 生命と生活への「価値」に対する想いをもち続けること。
- ② 「対象者」のもつ問題を理解すること。
- ③ 問題解決の方法を知識として学ぶのではなく、自ら体験を通じて認識しながら創造的に展開し、工夫すること。
- ④ 矛盾への追求努力である。
- ⑤ 一生の課題であり、人生をかけての課題である。

3. 目標

(1) 最終目標

養護学級との交流を通して、養護学級の生徒の生活や人柄に触れ、知的障害者に対する理解を深めるとともに、自分なりの考えをもつ。

(2) 視点別目標

- ① スキルの習得
手紙の書き方や電話のかけ方・インタビューの仕方を知る。
- ② 複眼的視点
養護学級の生徒や異年齢の障害者の生活や人柄に触れ、障害者を取り巻く現状や課題に対して自分なりの考えをもったり、交流を通して関わる前の自分のイメージと異なる考えをもつこ

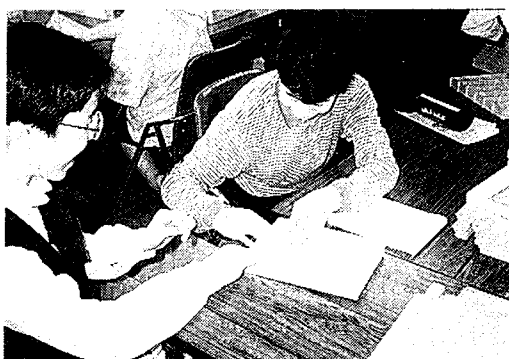
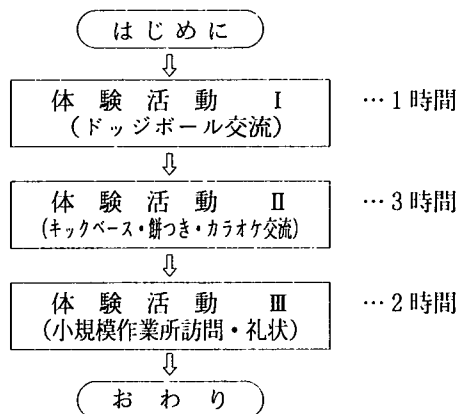
とができる。

③ 福祉の理解

講座での体験や講演、学級発表会を通して、障害者福祉について理解するとともに、自分なりの考えを深めることができる。

4. 体験を生かした学習計画と学習活動の重点

(1) 学習計画（総時数20時間）



(2) 学習活動の重点

体験活動を実施するにあたって、次の3点を重視した。

- ① 生徒自身の自由な発想（創造性）・主体性を大切にしたいと考え、代表生徒を中心に、生徒自身が企画・準備・実行すること。
- ② 養護学級の生徒の希望も考慮し、そのための意見交換・情報交換を積極的に行うこと。
- ③ 人との関わりを重視した体験にし、自分の五感を通して考え、確かめること。

5. 体験を生かした学習の実際

(1) 『養護学級と交流をしようⅠ』－関わりを大切にしたい取り組み

体験学習のための事前準備の1時間ではあったが、養護学級や学級の生徒について、実践者が一方的な知識を与えるよりも、できるだけ早い段階で養護学級の生徒との関わりを通して、学習者自身の肌で学級や生徒について感じて欲しいと願った。「百聞は一見に如かず」である。

そこで、学級で毎朝行っているドッジボールと一緒にすることにした。スポーツは、言葉がなくても交流できる良い方法である。また、ドッジボールは、多人数でも手軽にでき、養護学級の生徒には自信をもって取り組めるスポーツの一つである。

目標の一つに、気持ちだけでも対等に勝負することを掲げていたが、ボールを「ちょうだい、ちょうだい」といって無理に譲ってもらう養護学級生徒や養護学級の生徒をわざと避ける（遠慮する）者が目につけてしまう。中には強烈なボールを投げ、いつにない競争意識を見せた養護学級生徒もいた。初めての交流活動であり、お互いの関わり方が難しい様子であった。

事後の感想をいくつか紹介する。

「ドッジボールをすると聞いて、どうすればいいのかなと思ったけど、みんなすっごく球が速くてびっくりしました。手加減するどころか、こっちが手加減されたのかもしれない……。」

「ぼくは、養護の人があんなに強いとは思っていませんでした。が、それは僕が差別の心を持っているからだと思う。自分では差別していないと思っても心の中では差別がある。だから次の時間には心から友達になれるようになりたいと思う。」

甘えや遠慮が横行するドッジボールではなく、大いに対等に戦って欲しいと思う。本気で戦うからこそ交流の意義ある。

(2) 『養護学級と交流をしようⅡ』－生徒の意見を大切にしたい取り組み

今回は3時間という時間もあり、養護学級の生徒の意見を尊重しながら、できるだけ生徒だけの力で企画・準備・実行して欲しいと願った。希望調査の結果以下の内容に決定した。

- ・キックベースボール
- ・もちつき
- ・カラオケ大会

当日は、慌ただしい中でも、お互い協力しながら和気あいあいの雰囲気、少しずつ抵抗もなくなってきた。カラオケでは、大勢の人前で堂々と歌う

養護学級生徒の姿に圧倒された様子であった。

(3) 『はばたきの家（共同作業所）見学』－外の世界との関わりを大切にした取り組み

養護学級の生徒の将来的なことも含め、障害者を取り巻く現実について知ってもらおうと、学校近くの南田町にある共同作業「はばたきの家」を訪問した。

「はばたきの家」は、「市内の在宅心身障害者が集団行動を通して、日常生活に適応できる自立性を指導すると共に、能力に応じた作業を提供しながら、社会活動への参加及び、自活への体制づくり」を目的として、松江市手をつなぐ親の会が中心となって昭和54年に開所された作業所である。主な作業種目には、洗濯バサミの組立・各種箱折り・ビニールの袋たたみ・機械部品箱の仕切り組などがある。最初は、遠巻きに見学していた生徒たちも、「一緒にやってみませんか。」の一言に、一人・二人と参加し、仕舞いには全員が屈託なく作業手順を教わりながら必死に挑戦していた。松江名産の土産物のお菓子の箱が、この作業所のこの人たちの手で作られていることを知って新鮮な驚きとより親近感を感じた様子であった。

また、松尾所長からは、毎日一生懸命働いても月給が数千円と聞かされ、障害者の現実の厳しさを知らされた様子であった。そんな現実にも挫けず、明るく一生懸命生きる「はばたきの家」の皆さんの姿に、一層の感動を抱いた様子であった。

6. 学習の成果と課題

(1) イメージマップから

交流前の「暗い・不安・同情」といったマイナスイメージから、交流後には「明るい・陽気・笑顔・楽しい・元気・仲良し・絆・友達・協力」といったプラスイメージが確実に増加した。

(2) 生徒の感想文から

「暗いイメージやあまり運動はしないという感じがあったけれど、会ってからはそんなイメージは飛んで、明るくて、元気に運動していてとても楽しかった。みんなは、ぼくたちよりも一生懸命に毎日を生きている気がします。」 (M:K)

(3) アンケートから

「体験を通して見方が変わったことは何ですか。」
・福祉とは、やってあげるものではなく、するもの。
・みんな同じ人間だ。

- ・障害者への偏見を捨てる。
- ・ボランティアは心からしてあげないといけない。
- ・「自分たちでできることは何か。」を考えるようになってきた。……

(4) 新聞から

- ・総合学習を終えて…ぼくはこの学習を通していろいろなことを学びました。

障害をもっている人も同じ人間であり、だれにもその人たちを差別する権利はないということを自覚しなければならなかった。…

(Y:H)

- ・養護学級との交流で学んだことは、「接してみる」ということだったと思う。小学校時代、自分はそういった養護の人とほとんど関わりをもっていなかった。これといった理由は別にないが、自分から接していくことの苦手さが関係していたと思う。しかし、今回の学習で「自分から接していかなければ何も始まらない」ということを学んだ気がする。恥ずかしさなどよりも接していった交流や友情を得た方がずっといい気がする。

もう一つ考えたことは、障害はあってもやはり、お互いの気持ちを尊重し、協力しなければいけないということだ。自分だってもしかしたら彼らのような立場にいる可能性もあったかもしれない。また一歩間違えばそうなるかもしれない。自分は違うそういう気持ちが今の世の中で多く存在するのであったらとてもいやだ。

(N:T)

このように、生徒たちが障害児教育の本質・福祉の本質に関わる部分をしっかりと受け止め、各自がそれぞれに感じ、考えてくれたことを私たちはとても嬉しく、そして頼もしく思う。

7. 今後の課題

福祉とは強者が弱者にしてあげるものではなく、相互が対等な立場で、お互いを認め合い、尊敬し合って初めて成立する相互扶助でなければならない。そのためには、自分は何をしなければならないか、自分には何ができるのか、お互いにまず足元のできることから始めることが大切であると思う。

(はら ひろし・養護学級)